様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年 ５月 １０日現在

研究種目： 基盤研究（Ｂ）
研究期間： 2007～2010
課題番号： １９４０１００７
研究課題名（和文） 「マニラ戦」の実像と記憶：平和のための地域研究
研究課題名（英文） The truths and memories of the Battle for Manila 1945: Area Studies for Peace

研究代表者
中野 聡（ NAKANO SATOSHI ）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号： ００２２７８５２

研究代表者の専門分野： 歴史学
科研費の分科・細目： 地域研究
キーワード： 歴史学、政治学、地域研究、社会系心理学

１．研究計画の概要

本研究は、第２次世界大戦末期の「マニラ戦」に対象を絞り、これを「実像」と「記憶」の両面から学際的・総合的に検討し、さらに収集史資料と研究成果を翻訳・発信することにより、戦争の過去をめぐる日本・フィリピン（比）・アメリカ合衆国（米）など関係諸国間の「より質の高い対話と和解」実現の一助となること、すなわち平和のための地域研究を目的とする。具体的には（１）「マニラ戦」における民間人の大量死と残虐行為・都市破壊の原因究明と（２）戦後における「マニラ戦」問題の展開を研究のふたつの柱とする。さらに後者の個別的な研究主題として、①「マニラ戦」をめぐる戦争責任問題の展開、②加害・被害の関係者や関係諸国民への社会・文化精神医学的な影響、③「マニラ戦」の記憶と表象を検討するとともに、④なぜこの問題が「南京事件」のように関係諸国間で「歴史問題」化していないのかを分析し、⑤今後「歴史問題」化する可能性はないのか、⑥「真実と和解」の望ましい道を実現するための課題は何かを検討して、その研究成果を実践的に社会に還元してゆく。

２．研究の進捗状況

平成１９年度は、まず、①中野、林、永井が米国立公文書館を中心に史料収集を開始し、あわせて中野は「マニラ戦」生存者のインタビュー調査を実施した。つぎに、②「南京事件」との比較・相関研究のために研究組織に笠原十九司氏を加えた（7 月）。さらに、③研究成果の社会還元を予想以上に早く開始した。具体的には中野と林がＮＨＫ「マニラ市街戦：焦土への一ヶ月」に制作協力し、同番組（平成 19 年度文化庁芸術祭優秀賞受賞）8 月に放映され大きな反響を呼んだ。さらに公開シンポジウムを日本（一橋大学、12 月）およびフィリピン（アテネオ・デ・マニラ大学、2008 年 3 月）で開催した。

平成２０年度は、①林、永井が史料収集を継続し、中野はマニラ都市史関連資料の収集を開始した。宮地はマニラ戦被害者のトラウマ研究を開始した。つぎに、②研究成果の発信に力を入れ、中野が第 8 回国際フィリピン研究会議（2008 年 7 月、マニラ）で研究報告を行い、10 月にリカルド・ホセ（フィリピン大学）、リディア・ホセ（アテネオ・デ・マニラ大学）両教授を招聘、2009 年 3 月にハーバート・ビックス教授（ＳＵＮＹビンガムトン大学）を招聘してワークショップを一橋大学で開催するなどした。さらに、③中野が 1990 年以来行ってきたおよそ 30 時間分のテープをデジタル・テキスト化した。

平成２１年度は、①海外での研究成果発信に重点をおき、2009 年 11 月にジョージ・ワシントン大学で、2010 年 3 月にはハワイ大学マノア校で国際ワークショップを開催した。つぎに、②永井（マニラ）、中野（ワシントンＤＣ）がそれぞれ資料調査・インタビューを行い、荒沢千賀子（一橋大学院生）がマニラ戦のスペイン人生存者に対するインタビュー調査を行った。さらに、③各分担者・連携研究者が本科研に直接関連する論文・著書を相次いで発表するなど、研究成果の公開を本格化させた。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

「マニラ戦」の実像と記憶をめぐる資料収集・調査分析は予想を上回る画期的な成果をあげている。また国内外における研究成果の発信でも公開ワークショップ・シンポジウムをあわせて１０回（国内７回、国外３回）開催した。研究成果を実践的に社会に還元するという点では予想よりも早くＮＨＫ制作ドキュメンタリーに制作協力することで大きな成果をあげた。その一方、関連する重要資料の選定と相互翻訳、ウェブサイトの構築・公開はまだ準備段階を脱していない。以上を総合して「おおむね順調に推移している」と判断した。

４．今後の研究の推進方策

（１）最終年度である平成２２年度は、引き続き海外（フィリピン、アメリカ）における研究成果の発信に力をいれる。とくにフィリピン社会に研究成果を還元することに力を入れたい。

（２）研究成果の総括ワークショップを東京において開催する。

（３）マニラ戦関係資料の相互翻訳・出版にむけて資料の翻訳作業を進めるとともに共同研究論文集の構想を完成させ、史料集および論文集の出版に向けた作業を開始する。

（４）研究成果を公開するウェブサイトを構築し、年度末までに公開する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 林博史「日本軍の命令・電報に見るマニラ戦」『自然・人間・社会』、48 号、2010 年、69-95 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 12 件）

① Satoshi Nakano, “The Lost City: Carmen Guerrero Nakpil and the Battle for Manila 1945,” The 8th International Conference on Philippine Studies, July 24, 2008. Ateneo de Manila University, Quezon City, Philippines.

〔図書〕（計 21 件）

① 笠原十九司、岩波書店、『日本軍の治安戦―日中戦争の実相―』、2010 年、276 頁。

② 永井均、岩波書店、『フィリピンと対日戦犯裁判―1945-1953 年―』、2010 年、450 頁。

③ 中野聡、岩波書店、『歴史経験としてのアメリカ帝国―米比関係史の群像―』、2007 年、468 頁。